名古屋出身の俳人・国文学者沼波瓊音とたどる明治四五年の八事山興正寺

——本と／で遊ぶ（2）——

酒井　敏

昨年十月の『文学部紀要』で、水彩画家大下藤次郎の三回忌追悼会で森鷗外が行ったテーブルスピーチを紹介したが、[1]その論文で出典を明らかにできなかった一節を求めて、その後も沼波瓊音の著書を一冊ずつ翻き続けてきた。問題の一節は『大疑の前』（東亜堂書房　大正二年七月）に収められた短章「寝よ」だと判明し、当該論文を著書[2]に収める際に補っている。同書には、明治四五年四月に瓊音が八事山興正寺を訪れた際の所感を記した「八事」という短い随筆も収められており、当時の八事、就中興正寺の様子が詳細に描かれていて面白い。本学との縁りもあるので、この機会に引用・紹介したいと思う。引用に当たって、仮名遣いは原文通りとし、漢字を現行の字体に改め、ルビ等は適宜省略した。

八　事

嘗て病を得て春を郷里に暮しゝことあり。今「山行（やまいき）」の盛なりと人云ふ。八事山（やごとやま）へ山遊びに行くこと、名古

三二

屋人の春の行事なり。これを「やまいき」と云。父と共に行くことにす。斯く云ひ出しゝ前二三日に、八事行の電車開通せしなり。千種離るゝより、電車の窓に入り来る景、たゞ幼き折の儘にて涙こぼるゝ心地す。丘と云すら角立ちてふさはしからぬ地の高まり、緩らかに起伏して、菜の花その所々に咲き満ちたり。父は我が対ひの席に在り。我幼き折より老い給へりとは見えず。高等学校、大学の学生時代、伊賀の教師時代、文部省、新聞記者、さて其の後の著述生活、これ等の長き時間は、全く無に帰せり。我たゞ幼き儘の我にて、父に伴はれて「やまいき」に行くなり。菜の花の黄は限り無く続けり。池見ゆ。赤き幹の松、柔くくねりたり。刷毛もて抹りたるやうなる雲淡くたなびけり。徒歩にて八事に向ふ群あり。手拭を首にゆるく巻き、瓢携へたり。「……ヨンヨイ」と唄ふ。伊勢参りする折の唄とかや。「やまいき」にはよくこゝらの人の唄ひし幼き折の記憶、今たゞここもとに実現せり。十五年、二十年の歳月は一切無に帰せり。我たゞこゝに幼し。電車着きたり。成程八事なり。路の左に八事山境内の木立さまぐ物古り繁りたる、これは昔より小深き心地す。西山惣門を入る。赤き色したる土。美しき小石。正面に見ゆる五重の塔。あたりに売る竹片のさきに竹片まげて彩りたる紙貼り蝶の形作れる土産物、皆昔の儘なるよ。なつかしき哉我が八事よ。健かなる父は足早に先立ち行く。病ある我は徐ろに後に随ふ。ここは八事山興正律寺遍照院と云真言律宗の寺なり。このあたりの村を八事村と云。五重の塔をめぐり、能満堂の前より右に稍急なる坂を上る。左右に石塔婆無数に連なれり。高野山奥の院に擬したるものとぞ。やがて左に折れ、なほ石塔婆の間を行く。古き楼門あり。右に折れこの門をくゞり、なほ石塔婆の間を行く。土赤し。小石美し。云ふべからざる匂ひ、能満堂前より絶えず漂ふ。我は「やまいき」と云事をせずて経しこの年頃も、春などよくこの八事の景を思ひ浮べたり。されどこの匂ひは全く忘れ居たり。さなりくこの匂ひありしよと我は、喜ばしさ懐しさに、土に接吻し石塔婆に接吻せまほしく、物狂ほしきまでなり。

この匂ひを、知らざる人に何と伝へむ。墓地の匂か。それにてもあり。樒の匂か。それにてもあり。古き苔の繁き雨露に半ば腐れたる匂か。それにてもあり。メリーワードの劇に、女、森の中に踏迷ひて或匂を嗅ぎ男にむかひて「不思議なる匂ひ哉、我が記憶の残れる時の前より嗅ぎし匂のやうなる心地す」と云へることを記せり。ワードの顕はさむとせし匂は、この八事の匂のやうなる心地するなり、もとより我のみならむが。この匂は我が心を幽玄なる界に導きたり。路は更に左に折れ、更に、右に折る。石塔婆はなほ続き、不思議なる匂は山に漲る。土赤し。小石美し。稍広き平地に出づ。善衆界と云所なり。そこに大日如来南に向ひて在す。小学校の運動会の折、よくこの平地にて競技ありし。その頃競技と云へば、旗取競走と、球取とて両軍に分れて各の肩に縫附けたる布の球を取り合ふこととのみなりき。大日堂に上る。こゝより南に向へば熱田の海見ゆ。父「海見ゆ」と宣ふ。其の声はたゞ〳〵我が九歳十歳の折に、こゝにて指し教へ給ひし其折の儘の声なり。何故とは知らず。涙はら〳〵と落ちたり。父は海に向ひてこを知り給はず、怪しみ給はざりき。この堂の背後を呑海峯と云。細き松の根など、躑躅群がり咲けり。

瓊音沼波武夫は、明治一〇〔一八七七〕年一〇月一日、愛知県名古屋区玉屋町（現在の名古屋市中区丸の内）に生まれた[3]。父鉞之助は知多郡草木村の竹内司馬之進の七男。名古屋に出て瓊音の祖父沼波桃仲に入門、本道外科を学ぶ。さらに別の医師から洋方医学も学んで帰郷、開業医となったが、明治六年に桃仲の養子となってその六女すぎと結婚、代々医を業としてきた沼波家を継いだ。居敬と号して和歌・俳句をよくし、敬神の念が篤い人だったという。瓊音は、この父から古人の名句や也有、士朗ら縁りの俳人の逸事を聞いて、早くから俳味や句作に興味を抱く一方、子供心に神への尊崇の念を強めた。瓊音の受けた影響の大きさ、父との関わりの深さが窺われよう。

明治二二年に愛知県尋常中学校（現在の県立旭丘高校）に入学した瓊音は、二年進級に際して一度落第を経験したものの、二八年に卒業。同じ年に上京して、九月に第一高等学校（東大教養部の前身）に入学する。笈を負って上京するまでの少年時代を過ごした名古屋は、「八事」に繰り返し登場する「幼き折」の記憶と深く結びついた懐かしい「郷里」、まさに故郷（ふるさと）であった。

明治三一年、第一高等学校を卒業して東京帝国大学文科大学国文科に入学、俳句の会である「筑波会」（実作より俳論や俳史研究に強かった）や和歌革新を目指した「わか菜会」で活動、今なお東京大学総合図書館洒竹文庫に名を残す大野洒竹に兄事した。[4] 東京帝大を卒業した三四年の十月、三重県第三中学校（現在の県立上野高校）に赴任、かつて松尾芭蕉が暮らしたとされる蓑虫庵に住む。翌年二月に結婚、三月には教頭となるが、一一月には伊賀上野を引き払って上京、私立中学講師を経て三六年一月、文部省嘱託となる。そして、三九年一二月に文部省を辞し、翌四〇年二月に萬朝報社に入社した。これが「高等学校、大学の学生時代、伊賀の教師時代、文部省、新聞記者」の内実である。転石苔むさず——エネルギッシュで活動的とは言えようが、何とも目まぐるしく、席の温まる暇がない。

しかし、瓊音が大車輪の活躍を見せるのは、実はこれからなのだ。新聞記者をしながら、雑誌『青年』を大町桂月と編集発行したのを皮切りに幾つもの雑誌や出版社に関わりを持ち、さらに前年の『新古俳諧奇調集』『俳句講話』に続き、この四〇年には『俳論史』『俳句研究』『俳句の作法』などを刊行、以降も次々と著書を公にしてゆく。これでは心身ともに休まる暇がなく、前注（3）の「略歴」に、この年「此頃より長き胃病初（ママ）まる。」、四二年「胃病悪し。」と記されるのも当然と言えよう。多忙さから来る過重なストレスが胃を侵していたわけだ。

そんな状態だったにも関わらず、四三年からは、瓊音の文学活動において一つの中心をなした雑誌『俳味』の編

集刊行や洒竹が蒐集した俳書整理の手伝いなどが上乗せされる。「略歴」に拠れば「六月より多忙、午前三教書院、午後新聞社、夜は洒竹の営む病院に在りて俳書調査、更に三教書院に行き十二時過帰宅。」という日々であった。そこへ、追い討ちをかけるように「九月五日、三女安芸子出生。この月、妻たきが再度の盲腸炎をわずらい生命の危険を心配するほど」の重体となる。[5] 幸い命は取り留めたものの、流石の瓊音も過労やストレスが極点に達したのか、一切の仕事から離れて静養を強いられる仕儀となってしまう。

翌年三月、身体的理由もあって万朝報社辞任、雑誌「日本青年」の編輯も辞した。八月二十九日、三女安芸子死亡、十二月、長年の胃病、過労などで神経衰弱にかかり入院した。明治四十五年（一九一二）に入ってもまだ神経衰弱が続き、三月、伊東温泉に静養し、生家の名古屋に帰省して五月上京、少しずつ仕事が出来るようになった。[6]

「病を得て春を郷里に暮し」た明治四五年、瓊音は心身ともにどん底の状態にあったことになる。そして、「やまいき」に「父と共に行くことに」した「前二三日に、八事行の電車開通せしなり。」と書かれる通り、尾張電気軌道の千早～八事間四、八キロが開通したのが、まさに明治四五年四月二一日であった。長く見積もっても二ヶ月程度だったと思われる瓊音の帰省は、昭和四六（一九七一）年四月一日に名古屋市電八事～安田車庫前間が廃線（安田車庫前～大久手間は同四九年三月三一日に廃線）となるまで、永く名古屋の人々に親しまれた「八事電車」の誕生と重なっていたのである。

瓊音も下車したに違いない開通時の八事駅は「西山惣門」[7] 付近にあり、後に大学坂の登り口付近（現在エレベーターのある辺り）まで延伸されると、その名も興正寺前と改められ、八事の駅名は当初天道と呼ばれた新駅に引き

継がれた[8]。「菜の花の黄は」以下、車窓からののどかな風景を叙述した中に「池見ゆ。」と登場する「池」は隼人池であろう。道路拡幅や地下鉄の開通によって急速に進んだ住宅地化で削られるまで、周辺は緑濃い丘陵地の起伏が間近まで迫っていた[9]。ここに描かれる情景を彷彿させる一節を、前注（7）『昭和区誌』が「（ある古老の思い出）」として掲載している証言から引用しておく[10]。明確な時期は不明ながら、瓊音も同じようなにぎわいを目にしていたはずである。

春になると八事へ山行きの客をいっぱい乗せた八事電車が走っていくのをよく見たものです。特に，帰りには窓から八事名物の蝶々や山つつじをかざして通るのを，子供の私たちは遊ぶのも忘れて，見送りましたね。ときには，窓から出していた蝶々が風に吹かれてひらひら飛んでね，まるで本物の蝶々みたいでしたよ。それを私たちが争って拾うんです。

「八事名物の蝶々」については、瓊音も「あたりに売る竹片のさきに竹片まげて彩りたる紙貼り蝶の形作れる土産物、皆昔の儘なるよ。なつかしき哉我が八事よ。」と懐旧の思いを込めて描いていた。この「八事の蝶々」は、八事を訪れる行楽客の土産物として広く知られるようになった郷土玩具で、本学名古屋キャンパスセンタービル前の地下鉄換気塔のデザインにも使われている。明治維新後に、帰農してこの地域の開拓に従事した尾張藩士たちの農閑期の内職が始まりとされるが、郷土玩具としてはもっと古くから存在していたとも言う。キビガラの胴に竹ヒゴでかたどった羽を取り付け、和紙を貼って彩色したカラフルな蝶を細い竹の先に留め、持って歩くとフワフワと揺れ動くようにしてある。今世紀の変わり目頃からしばらく、八事商店会の店々に置かれ、配られもしたが、最近はほとんど実物を目にしない。保存会によって受け継がれているそうなので、その素朴で可憐な姿を再び見せて欲しいと思う[11]。こうした具体物によって、文献の中にしかないと考えがちな過去が、生き生きと現在に甦るのだから。

瓊音が訪れた当時の堂塔や「八事山境内の木立」の「物古り繁りたる」様子は、『尾張名所図会』前編巻之五所収「八事興正寺」の絵図（図③）が伝えるイメージとほぼ同じであろう。現在、瓊音が「入」った「西山惣門」は撤去され、新造の釈迦牟尼仏（平成大仏）が「正面」の五重塔の前に鎮座している。しかし、ほぼ同じ道順で散策することは可能だ。

瓊音は「五重の塔をめぐり」絵図中の階段を登って「能満堂の前」に出たのだろうが、今日ではエスカレーターで一息に登れる。これでは大きな高低差をほとんど意識できないが、急な階段を登ってたどり着くと「木立」が陽射しを遮って小暗く、まさに「高野山奥の院に擬した」深山の趣きを感じられたろう。まだ圓照堂は建てられておらず、深い緑に囲まれていたはずである。瓊音も「赤き幹の松」と書いているが、もともと興正寺の「雑木林に限らず、八事丘陵の林は長い間アカマツ林」であり、現在の「クヌギ・コナラ林に移行するまでは」コバノミツバツツジが「春を彩る普遍的な花木」であった。「八事山へ山遊びに行く」「やまいき」とは「四月上旬～中旬ごろ」に盛りを迎える「ツツジの名所」八事での花見を指したのである。[12] 人工的な境内の整備だけでなく、興正寺を取り巻く自然の植生も時間の経過によって移ろう。瓊音が味わった感覚を追体験するには、いささかの想像力が必要だ。

「能満堂の前より右に稍急なる坂を上」って「善衆界」に到るまで、「古き楼門」に当たる絵図中の「女人堂」こそ失われているものの、現在でも絵図のまま「左右に石塔婆無数に連な」る道が瓊音のたどった道順通りに続く。ただし、森林保護・植生管理による伐採や間引の結果、見通しがきいて明るく、転倒の危険のある「石塔婆」を撤去したからか、宝篋印塔も整頓されて少なくなっているようである。[13] 同様に、瓊音が繰り返し言及している「赤き色したる土。美しき小石。」や「能満堂前より絶えず漂ふ」「云ふべからざる匂ひ」の風情も、そのまま追体験はできまい。

「八事山」（＝八事丘陵）を構成する「八事層は赤紫色のシルト（泥の一種で粒の大きさが粘土と砂の中間のもの）層や、八事礫（砂よりは大きい小石）層」からできている。[14] 境内の主要部分に白い砂利が敷かれたのは、西門の撤去や平成大仏、あるいはエスカレーターの設置などと同様、ごく最近のことだ。瓊音は覆われる前の生地（きじ）、現在では隠されている基層を目の当たりにしていたと言えよう。

「墓地の匂」「樒の匂」「古き苔の繁き雨露に半ば腐れたる匂」などと、懸命に読者の共感を喚起しようとしている「云ふべからざる匂ひ」も、先の伐採や間引きに加え、烏による被害の対策として線香や蝋燭の火の始末や供物の持ち帰りが厳格になった現在では、ほとんど嗅げまい。樹下の落ち葉を踏んで「八事山を歩こう会コース／学習の小径」などを歩くとき、その片鱗がわずかに窺える程度であろう。「八事の景を思ひ浮べ」ることはあっても、「全く忘れ」ていた「八事の匂」を嗅いだ瓊音は「喜ばしさ懐しさに、土に接吻し石塔婆に接吻せまほしく、物狂ほしきまで」になったと記す。「メリーワードの劇」[15] の一節を引いて説明するところに従えば、それは言わば前世の記憶につながるような「匂」であった。そんな「我が心を幽玄なる界に導」く「不思議なる」「八事の匂」が「山に漲」っているのを瓊音は感じた。これこそが、瓊音の帰省・興正寺再訪の核心をなす体験であったろう。

プルーストの『失われた時を求めて』が有名だが、しばしば指摘されるように、香りや匂いは通常の記憶とは異なる形で過去を呼び返す契機となる。この「云ふべからざる」「八事の匂」は、心の深層に潜められていた「幼き折」の自分、可能性の他には何も手にしていない自分を浮上させた。その「匂」に導かれて、かつての「やまいき」の記憶・興正寺の記憶が呼び覚まされ、例えば外の世界への好奇心に胸を躍らせていた自身の原点に回帰したのである。それによって現実と向き合う新たなエネルギーを得たからこそ、改めて志を思い起こし、「五月上京、少しずつ仕事が出来るようになった。」のであろう。帰省した瓊音は故郷に癒され、活力を甦らせた。言うまでもなく、「八

事の匂」を嗅ぐことのできた興正寺体験こそ、その焦点に他ならない。

当世風に強い霊力に満ちたパワースポットだったと言ってもよいが、興正寺が姿を変えていなかったからこそ、瓊音はその霊力に感応できたのである。確かに旧弊は更新しなければならず、閉塞感の大きい今日、変化を促す声が強いのも頷けよう。しかし、自然が新たな姿へと移ろうには、しばしば人間の一生を超える長い時間が必要である。それに必要なだけの時間を費やさなければ、内発的な真の変革は遂げられず、早急に結果だけを求めても有意義な成果は得られない。残るのは、徒らに努力を強いられる虚しさだけである。新たな仕事の負荷が次々に重ねられる瓊音の心も、そんな軋みに悲鳴を上げていたのではなかったか。本来不可能な速成、人間のライフサイクルを度外視して変化を求める無意味さが改めて実感されるエピソードだと言えよう。追い立てられるようにして日々を過ごし、自分の居場所を見失いがちな昨今、現実との関わり方を考え直す処方箋ともなる。

ここに言う「善衆界」とは、図書館脇から弘法堂の前を通って、あるいは4号館裏から奥之院を経て、スポーツ施設や法学部のある第二校地に抜ける途中、中秋の名月の日に行われる千燈供養の際に護摩を焚く護摩壇のある広場に他ならない。普段は用事に紛れて何も考えずに通り過ぎてしまうが、改めて「大日如来南に向ひて在す」大日堂の前に立ってみると、この場所の高さを実感できる。興正寺の寺域で最も高い「堂の背後」「呑海峯」は、八事丘陵分水嶺の一角をなし、標高六五メートル[16]。現在ではセンタービルの七、八階以上でようやく名港トリトンが見える程度[17]だが、「あゆち潟」を詠った万葉集の昔から八事周辺は眺望に恵まれた土地として知られ、この当時でも「熱田の海」（＝伊勢湾）まで見渡せた。

そんな眺望を楽しむ父の「「海見ゆ」と宣ふ」「我が九歳十歳の折」「の儘の声」を聞いて、瓊音の目から「涙はら〳〵と落ち」る。「健かなる父は足早に先立ち行く。病ある我は徐ろに後に随ふ。」との叙述が象徴的だが、この

「やまいき」はおそらく父がリードし、瓊音を誘い出したものだ。一〇月に三五歳になるとは言え息子は息子、興味関心や性向において影響を及ぼしただけでなく、父はまた瓊音を気遣い、愛情深く見守っていたのである。言外にそれを感じ取った感謝の涙でもあったろうが、「石塔婆」の続く樹陰の道から広場へと抜けて心身ともに解放され、心の緊張がほぐれたゆえの涙でもあったろう。瓊音が全身で興正寺の霊力に感応した瞬間と言い換えてもよい。「善衆界」は、まさに瓊音の興正寺体験の終着、彼と興正寺との物語の結びの場所であった。それを知れば、体育の授業やクラブハウスとの行き来など、日々に通る身近な場所が自ずから違って見えてこよう。身近であるゆえについ見過ごしてしまいがちな日常生活の場も、しばしば魅力的な物語を潜めているのである。

東京に戻った瓊音は、俳句や短歌など文学方面だけでなく、人間の生をめぐって思索や信仰を深めるなど、旺盛な活動を続ける。俳句研究、特に芭蕉と蕉風の研究に大きな足跡を印し、大正一〇（一九二一）年からは母校である一高や帝大の教壇にも立ったが、大正一二年末の虎の門事件[18]に大きな衝撃を受け、晩年は憂国の情に突き動かされて専ら国事に奔走、昭和二（一九二七）年七月一九日に東京本郷の瑞穂会（大正一五年に自ら創設した日本精神研究の会）会議室で亡くなった。しかし、そんな瓊音の後半生は本稿の関心の外にある。興味を持たれた方は注（3）に掲げた文献などを参照していただきたい。

悠長な載籍調べに見えようとも、丹念に書物の頁を繰っていると、今回のような思わぬ出会いが果たせたりする。ここに読書の喜びがあり、未知なるものを一つ一つ明らかにしてゆく学問の醍醐味があると言えよう。

注

（1）「大下藤次郎三回忌追悼会における森鷗外―新資料「大下氏の追悼会へ（雑司ケ谷と上野）」（鵜澤四丁）を読む―」（『中京大学　文学部紀要』第56巻第1号　令和3年10月）。

（2）『森鷗外―作品と周辺―』（鼎書房　二〇二二年九月）。

（3）以下、瓊音に関わる記述は「故瓊音沼波武夫先生略歴」（『噫瓊音沼波武夫先生』瑞穂会編輯・発行　昭和三年二月。以下「略歴」と記す）、吉田文子他「沼波瓊音」（昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書第二十七巻』昭和女子大学　昭和42年8月）に拠った。

（4）洒竹の蒐（コレクション）書が東大総合図書館に収められた経緯について、伊藤松宇「沼波先生に対する追憶」（前注（3）『噫瓊音沼波武夫先生』所収）に以下のような叙述がある（引用に当って「八事」と同様の措置を施した）。

大正二年に洒竹さんが病歿せられて後彼の洒竹文庫の俳書が洒竹文庫の名の下に大学の図書館へ収めらるゝやうになりましたのは沼波先生の御斡旋に依つたのであります。

なお、松宇は「明治三十二年頃根岸の伊香保楼で筑波会の俳席で大野洒竹さんの紹介で」（引用同前）瓊音の知遇を得たと言う。

（5）引用は前注（3）「沼波瓊音」に拠る。

（6）引用は前注（5）に同じ。

（7）かつて、今も残る「別格本山八事山興正寺」の石柱付近にあった（図①）。名古屋市教育委員会が設置した市電興正寺前の賑わいを伝える解説パネルの位置より、やや西（杁中方面）に寄っていることになる。

水野時二監修／昭和区制施行50周年記念事業委員会編集『昭和区誌』（同会・名古屋市役所発行　昭和62年

10月）「第5章　近世の昭和区／第4節　村の社寺」（本節の執筆は近藤宗光）に、興正寺は「東西2山に分れ，東を遍照院と称し，西山を普門院と号」し、

東山では高野山の奥の院に倣い，参道の左右に石造の宝篋印塔約360余基が並立され，女人門よりは女人結界（入山禁止）とされた。しかし西山はこの禁制がなかったので参詣人も多かったという。

との記述があるように、参詣者は多く「西山惣門」を利用した。現在の縁日やマルシェの賑わいが思い合わされよう。

（8）本稿の記述も多くを負っているが、「八事電車」については堀研一「八事電車物語」（八事・杁中歴史研究会『八事・杁中歴史散歩【増補改訂版】』樹林舎編集制作／人間社発行　二〇一八年八月）に要領よく記述され、日本で唯一「霊柩電車」が走った「墓地線」（八事霊園の整備・開園に合わせて八事から霊園入口まで単線で開通した支線）の記述も含めて面白く、付図も豊富で参考になる。なお、本書は「開通翌月の五月十二日に」天道まで延伸されたと記すが、ウィキペディアの「尾張電気軌道」には「工事が遅れて、1912年9月19日」（七月に改元されて大正元年になっている）とある。両者とも支線の「大久手～今池間が開通し」たのは五月一五日としており、後出『昭和区誌』は日付なしで「今池～大久手（0、7㎞），興正寺～八事（0、5㎞）と順次路線を延ばし」と記しているので、ひとまず両論を併記しておく。

（9）浅井金松・山田寂雀・浅井昭政『秘蔵写真館名古屋いまむかしシリーズ〈2〉昭和・瑞穂・天白編』（郷土出版社一九九三年七月）に「水を豊かにたたえる隼人池。静寂を破るかのように市電が走っていた（昭和29年12月）」のキャプションで掲載されている写真（「市電の通った街並み／隼人池」同書147頁）など、その雰囲気をよく伝えている。

(10) 同書「第7章　大正・昭和（戦前）の昭和区／第3節　公共交通機関の発達」に拠る。本節の執筆は角谷京一。

(11) 「八事の蝶々」については、名古屋国際高等学校社会科教科会編『名古屋区史シリーズ　昭和区の歴史』（「第六章　昭和区の民俗／⑪八事の蝶々」。平成11年1月）、前田豊「禄を失った尾張藩士たちの奮闘」（八事・杁中歴史研究会『続八事・杁中歴史散歩』樹林舎編集制作／人間社発行　二〇二二年四月）などを参照したが、興正寺にも置かれているパンフレット『ショウちゃんとめぐる　ぶらり昭和区ＭＡＰ～八事・興正寺～』（名古屋市昭和区役所発行）にもカラー写真（図②）と要領のよい説明が掲載されている。

(12) 大崎輝明「植物ものがたり」（前注（8）『八事・杁中歴史散歩【増補改訂版】』所収）に拠る。瓊音が「細き松の根など、躑躅群がり咲けり。」と結んでいることが改めて思い合わせられよう。

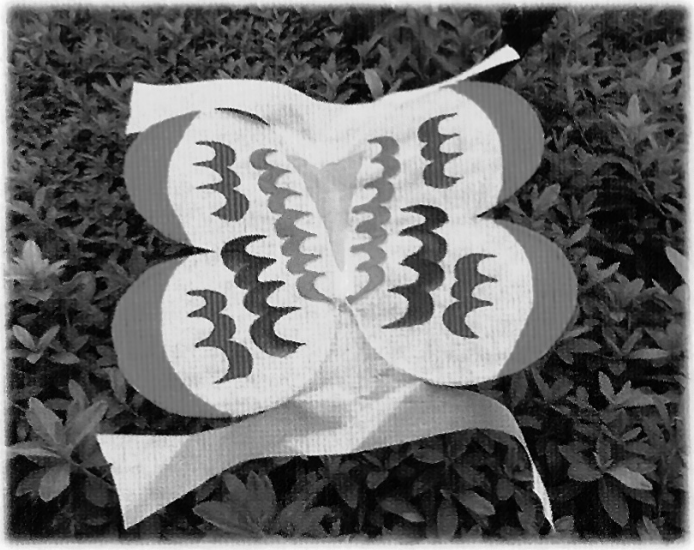
(13) 編集考房とその仲間たち＝土曜倶楽部＋準構成員『名古屋いまむかし　足を止め見つめてみようもう一度心の吐息を土の匂いを』（編集考房　昭和53年6月）掲載の「興正寺〈昭和区八事本町〉　高野山を模してつくられた真言宗の寺で、西山と東山を結ぶ参道には無数の宝篋印塔が立ち並ぶ。」というキャプションの写真が、往時のありさまの一斑を伝えていよう。

(14) 福井章「江戸時代の鹿狩りや松茸狩り」（前注（8）『八事・杁中歴史散歩【増補改訂版】』所収）に拠る。

(15) タイトル等、この「劇」の正体を詳らかにできないが、「メリーワード」とは英国の作家・社会事業家、メアリ・オーガスタ・ウォード（Mary Augusta Ward　一八五一～一九二〇年）であろうか。タスマニアに生まれ、結婚後はロンドンで暮らした。児童の保健問題に関心を持ち社会活動を行う一方、宗教や社会問題を扱った作品を多く残している。

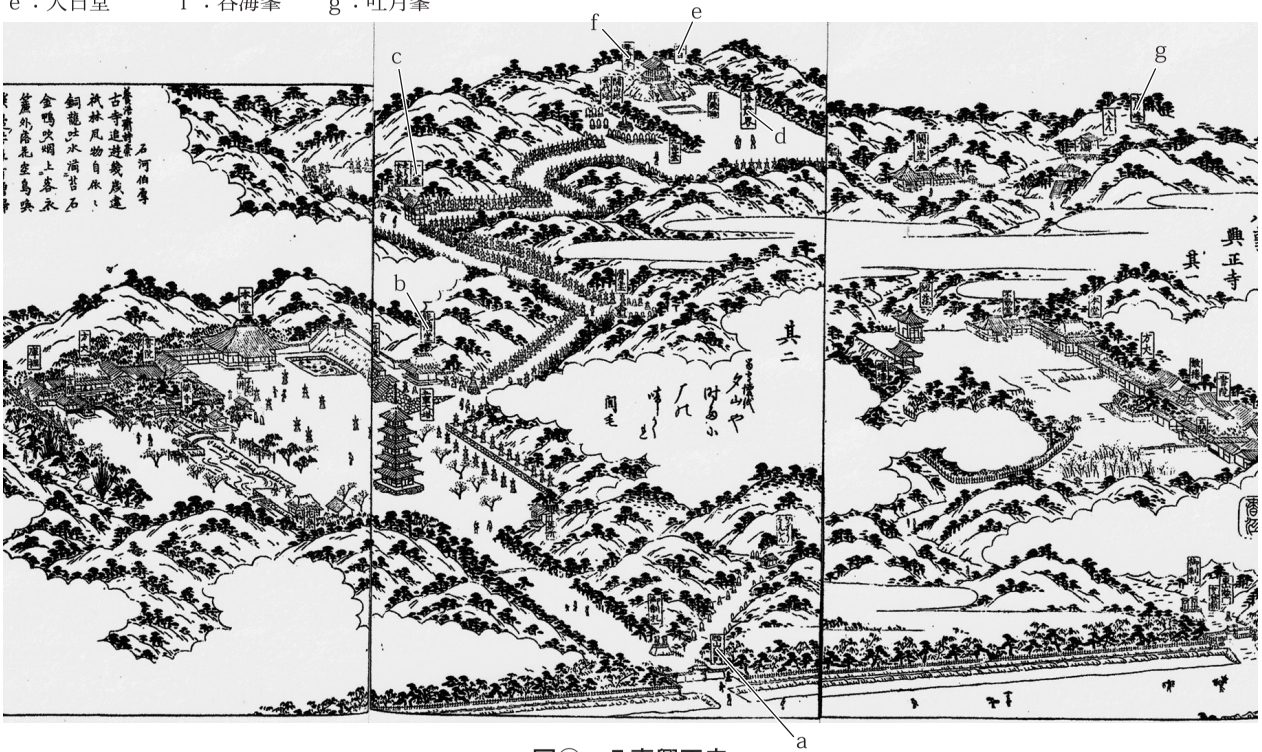
(16) 堀研一「八事分水嶺の歴史旅」（前注（8）『八事・杁中歴史散歩【増補改訂版】』所収）に拠る。

図①　ありし日の「西山惣門」



図②　八事の蝶々

a：西山惣門　b：能満堂　c：女人堂（「古き楼門」）　d：善衆界
e：大日堂　f：呑海峯　g：吐月峯



図③　八事興正寺

（17）横井敏治の「興正寺に隠されていた軍事的役割」（前注（8）『八事・杁中歴史散歩【増補改訂版】』所収）に指摘があるように、現在では興正寺の「東山」の多くが本学名古屋キャンパスの敷地となっている。絵図中の「吐月峰」の辺りに図書館があると考えればよかろう。

（18）同年一二月二七日に起こった、難波大助による摂政（後の昭和天皇）狙撃事件。

図版出典

①浅井金松・山田寂雀・浅井昭政『秘蔵写真館名古屋いまむかしシリーズ〈2〉昭和・瑞穂・天白編』（郷土出版社一九九三年七月）巻頭カラーページ「歴史を今に伝えて」（注（9）同書）

②パンフレット『ショウちゃんとめぐる　ぶらり昭和区ＭＡＰ～八事・興正寺～』（名古屋市昭和区役所発行）（注（11）同書）

③『復刻版　尾張名所図会(上巻)』（株式会社愛知県郷土資料刊行会　昭和56年7月　再版）五〇三～五〇五頁（一部加工）